

1P59

「令和2年度 市町村乳幼児健診事後教室実施状況 およびフォロー事業に関する調査」結果概要

大城 勇輝¹、天久 親紀¹、富樫 恭平²

¹ 社会福祉法人 沖縄肢体不自由児協会 沖縄県発達障害者支援センター

² 医療法人へいあん 平安病院

【目的】

市町村における早期発達支援に関する状況把握のために「市町村乳幼児健診事後フォロー事業実施状況に関する調査」を実施したので、結果をここに報告する。

【方法】

対象は県内全41市町村の母子保健主管課、調査期間は令和3年1月から2月、回収数37市町村（回収率90.2%）であった。調査は平成31年度における①乳幼児健診事後フォロー事業に関する項目、②乳幼児健診事後教室（以後、事後教室）実施状況に関する項目、③健診後の「発達の気になる子」フォローにあたっての課題について、回答を求めた。

【結果】

○ 内市町村数：①健診後のフォロー内容としては、事後教室（17）、心理相談（31）、保育所等の訪問・巡回（21）、巡回支援専門員整備事業の活用（12）、障害児等療育支援事業の活用（4）が挙げられた。②事後教室を実施している市町村について、開催頻度は殆どが月1回、参加回数制限は殆どが5から6回であった。参加契機は、多い順に1歳6か月児健診、心理相談、健診後フォロー、訪問・電話、3歳児健診、その他；保護者からの連絡、園から勧めなどであった。出生数に対する事後教室への参加児の割合は、中央値5.20%であった。③健診後のフォローにおける課題としては、保護者支援・家族支援（26）、対象児の評価・アセスメント（16）、情報共有（15）、移行支援（15）関係機関・関係課連携（14）、事後教室後の移行先について（6）であった。

【考察】

本調査では、フォローにおける課題として、健診時におけるスクリーニングに関する精度向上、保護者への伝え方や関わり方、発達支援資源への理解など専門職の資質向上が求められることが示唆された。つまり、保健師を始めとした支援者には健診における発達確認や発達障害特性の確認に加え、保護者と子の姿や特性について確認を行い共通認識を持つこと、そこで生じる保護者の不安に寄り添うなどの関わること、家庭状況や子の特性に合わせた資源への理解が必要だと考えられる。また、健診だけではなく、保護者の子の発達特性に関する理解や受け入れ状況、就労等の生活状況、親子のいる地域性などに対応する多様な資源の構築が求められる。しかし、市町村によって支援資源の違いが見られたため、各資源の強みと課題について更なる検討を行い、地域に合わせた支援体制の構築が必要だと考えられる。

1P60

発達障害児の親子を対象としたペアレント・トレーニングと運動遊びプログラムの効果について

大久保 千恵

京都橋大学

【はじめに】

野呂（2013）は発達障害児の母親では、「一般の母親と比べて抑うつが疑われたのが約2倍、重度抑うつが疑われたのが約10倍」であったと、発達障害児の母親に抑うつ割合が高いことを示した。ペアレント・トレーニングは、子どもの適応行動の獲得と行動問題の減少に効果があり、親の養育技術の向上と養育ストレスの低下、うつ状態の軽減に有効であることが報告されている（免田ら,1995）。

【研究の目的】

本研究では、発達障害児の親子が参加するプログラムを実施し、プログラム参加前後における、母親の抑うつと子どものADHD傾向の変化について検討することを目的とした。

【方法】

発達障害児の親子を対象とした8回1クールのプログラムに初めて参加した母親を対象に、プログラム開始前と終了後にCES-D、ADHD-RSへの回答を求めた。親がペアレント・トレーニングに参加中、子どもは運動遊びに参加した。なおこのプログラムは事業として実施したため、研究倫理審査は受けていない。結果の公表は参加者の同意を得て行った。

【結果と考察】

参加した母親10名の平均年齢は41.10歳（SD=4.91歳）、子どもの年齢は5歳から9歳（平均年齢7.40歳）で、男児8名・女児2名であった。

子どもの多動得点の平均（標準偏差）は参加前は13.9（5.72）参加後は12.7（4.69）で、有意な変化は見られなかった（ $t=1.08, df=9, p>.10$ ）。また、子どもの不注意得点は、参加前は17.8（6.49）参加後は15.0（5.16）で、参加後に有意に得点が低下した（ $t=1.70, df=9, p<.10$ ）。子どもはプログラム参加によって、不注意傾向が改善された可能性が見いだされた。

保護者のCES-D得点は、ペアトレ前に13.0（6.70）ペアトレ後11.1（7.13）で、抑うつ反応は減少傾向だが有意な差は見られなかった（ $t=0.85, df=9, p>.10$ ）。個別のケースについて検討すると、ペアトレ前にカットオフポイント（COP）を超えていた母親は3名であったが、その内2名はペアトレ後COP内に低下し状態は改善されたと言える。残りの1名はCOPを超えたままであったが、ペアトレ後新たにCOPを超えた保護者は一人もいなかった。統計的な検討は困難であったが、ペアレント・トレーニングに保護者の抑うつ傾向を改善する可能性があると考えられた。